

## プロテストを出させるな！

本間三和子

### 1. はじめに

アテネオリンピックでは、国際水泳連盟(FINA: Federation Internationale de Natation) シンクロ技術委員会(TSSC: Technical Synchronised Swimming Committee) 委員として、競技運営、審判員編制、審判員の査定などに携わった。本稿では、シンクロの上位国の競技結果がアテネオリンピックまでの数年間にどのように変化したのかを分析し、また IF 役員として初めて参加したオリンピックについて書かせていただく。

### 2. シンクロ上位国の競技結果の推移

#### 2.1 日本シンクロチームの銀

金メダルを目指して突っ走ってきた日本シンクロチームであったが、結果はシドニーに続いてデュエット、チームともに銀メダルであった。日本チームは善戦、大健闘したが、ロシアが日本を上回る演技をし、その結果、金には届かなかった。アテネオリンピックの競技結果は表 1 に示す通りであった。

表1 アテネオリンピック(2004)シンクロナイズドスイミング競技結果

	デュエット		チーム	
金	ロシア	99.334	ロシア	99.501
銀	日本	98.417	日本	98.501
銅	アメリカ	96.918	アメリカ	97.418
4位	スペイン	96.251	スペイン	96.751
5位	フランス	95.584	カナダ	95.251
6位	カナダ	95.334	中国	94.584
7位	中国	93.668	イタリア	94.084
8位	イタリア	93.250	ギリシャ	92.750

#### 2.2 2002年～2004年の各国得点推移

図 1、2 は、デュエットとチームにおける 2002 年から 2004 年までの国際大会の成績(得点)の推移をみたものである。2002 年ワールドカップ、2003 年世界選手権、2004 年 4 月アテネオリンピック予選、2004 年 8 月アテネオリンピックの 4 つの大会での得点の推移をみると、デュエット、チームともに、1 位(ロシア)および 2 位(日本)の 2 カ国と、3 位以下の国々との間に差があることがわかる。デュエットにおいては、スペインが 2003 年に急浮上し、勢いに乗ってアテネオリンピックで 3 位に到達するかと思われたが、演技の出来が振るわず、ベテランのアメリカにメダルをう

ばわれた。また、カナダは 2002 年には 3 位であったのが、一気に順位を落としアテネオリンピックでは 6 位に終わった。

チームにおいては、2002 年に 3 位・4 位争いをしてきたアメリカとカナダの明暗が分かれ、アメリカは確実に 3 位を獲得し続け、カナダはこの 2 年間に 5 位、それも 4 位と差の大きい 5 位にまで順位を落とした。スペインは 2003 年以降、3 位のアメリカにぴったりとついており、オリンピック初メダル獲得のチャンスを狙っていたが、オリンピック本番で大きなミスを犯し、メダル争いに加われなかった。

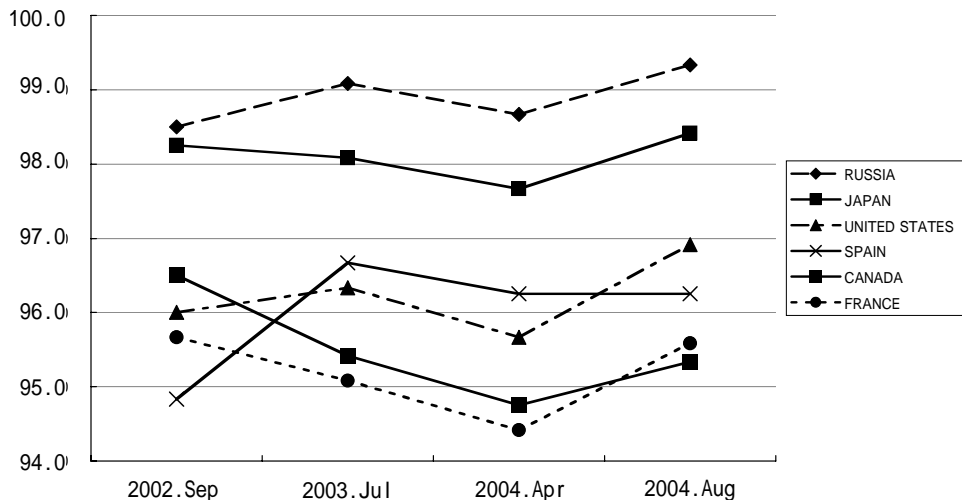


図1 デュエット得点の推移

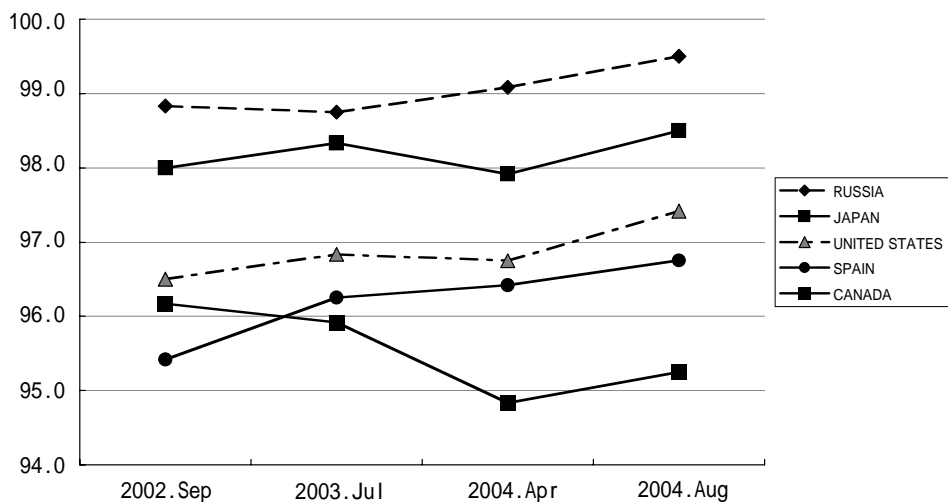


図2 チーム得点の推移

### 2.3 オリンピックを制する戦略

オリンピックという大きな舞台で確実な力を出すことは、当然「言うは易し、行は難し」であるが、ロシア、日本は手堅く戦った。シドニー後の4年間、ロシア、日本の両国とも、着実にメダル獲得に向けて強化してきた。演技構成に関する戦略はそれぞれ異なるが、ロシアに関して言えば、アテネで披露したチームの演目『カーニバル』はこれまでのロシアの殻を破った大胆な挑戦だった。アップテンポのリズムで次々に見せ場を入れ、スボード感のある意表をついた展開とその完成度は、

敵国とはいえ本当にすばらしかった。一方、日本は、これまでと同様に日本独自の文化を前面に押し出したプログラムを披露した。チーム演技のテーマは、『阿波踊り』と『サムライ』、デュエット演技のテーマは『さくら』と『ジャパニーズドール』で、いずれも和の音を意識した音楽を用いた。日本的な音楽は、上手く使えば意外性や独自性でアピールできるのだが、聴く人の耳に調和しなかった場合には非常に違和感を与える。日本調の曲は硬い(はっきりしている)ので曲線美を表現しにくいという不利な面もある。今回、演技の完成

度は高かったものの、残念ながら日本チームの意図を十分に伝えきれず、観る人の心を動かしきれなかったことが金メダルに届かなかった原因の一つと推察される。

アメリカは過去のシンクロ大国の意地を示し、デュエット、チームともに銅メダルを獲得した。同じく過去のシンクロ大国であったカナダの凋落ぶりとは対照的だった。そして、やはりオリンピックの凄さなのか、新鋭スペインはこ一番で力を発揮しきれなかった。今回、スペインをみていて、オリンピックでメダルを取るとは簡単なことではないことを改めて痛感した。

### 3. IF 役員としての初めてのオリンピック

#### 3.1 『不祥事』は絶対に避けよ！

シンクロ競技が始まる前日、FINA シンクロ技術委員会ミーティングの席上、FINA 副会長でシンクロ担当理事から、とにかく問題を起こさず平穩に競技が進行されるよう努力してほしいと強く釘を刺された。アテネオリンピック開幕後、体操競技会場では採点に納得いかない観客からのブーイングで競技が一時中断するという出来事や審判のミスジャッジ(誤審)が露呈したばかりだった。また、隣の競泳会場では泳法審判でレフリー判定が二転三転し、競技に混乱をもたらした。これらの事件が FINA 理事の間で大問題になっており、とにかく問題の起きやすいシンクロで何か起きたらシンクロ競技の存続が危うくなると、厳しい面持ちで伝えられた。シンクロ担当理事は、「シンクロ競技ではそのような『不祥事』を絶対に生じさせてはならない」と言った。そして、彼は言葉にこそ出さなかったが、「プロテストを出させるな(出す前を出すのを取りやめさせよ)」、「もしプロテストを受け取っても却下しろ」ということを暗に示していた。オリンピックでプロテストや騒ぎがあったとなつては、競技の存続に関わるからであろう。それにしてもシンクロ担当理事は異常なほどに IOC と FINA を意識していた。

後日談であるが、先述の、競泳であいまいな判断を繰り返した当該レフリーの FINA 競泳技術委員会委員は、FINA 競泳技術委員の職を今期がざりて辞することになった。

#### 3.2 審判員の査定

今回、われわれシンクロ技術委員に課せられた

仕事は、最後まで何事もなく成功裡に競技を運営することであった。その中で、私は審判員を査定するエバリュエーターという大役を仰せつかった。審判員に、ミスジャッジ(誤審)をさせないこと、バイアスジャッジ(偏見による不当な評価)をさせないことが私の役目であった。大会期間中、この仕事に全神経を集中させた。オリンピックは全世界から FINA 公認 A 級ジャッジ 15 名が選抜された。ベテランジャッジもいれば、A 級に昇級して日の浅いジャッジもいた。査定終了後、4 段階評価結果とその理由をつけて各ジャッジに評価表を配付する。4 段階中「2」以下の評定の場合は「不適格」となり、その後の審判活動が制限される。この仕組み(エバリュエーションシステム)は、審判員が適切な採点をするよう仕向け、バイアスジャッジ(偏見による採点)やミスジャッジ(誤審)を抑えるために用いられている。アテネオリンピックでの 15 名のジャッジの評価は、全員合格基準に達していた。

#### 3.3 途絶えることのない審判への不満

競技 3 日目、IF 役員として恐れていたことが起きた。デュエットフリー予選終了後、翌日の決勝の出場順を抽選するために集まった監督者会議(チームリーダーミーティング)で、デュエットの予選競技結果についてある国の監督からクレームが出された。ジャッジのスコアに対する不服であった。自国が正当な評価を受けなかった、という類いの不満であった。この監督の一言が端を発して、他国の監督が口々に不平不満を述べ始めた。不平不満の内容を整理すると、ひとつは、まるで最初から決められたように 0.1 点ごとにランキングされたジャッジスコアに対する不満、もうひとつは、そのときの出来不出来が点数に反映していない、正当に評価されていない(以前より上手になっているのに点数が上がっていない)という不満であった。

この手のクレームは必ずといってよいほど毎大会聞こえてくる。自分たちの狙った順位を獲得できなかった国は、その敗因をジャッジの責任にすることが多い。その一方で、予想以上の好成績を収めた国からクレームは出ない。事実、今回、大きな声をあげて不満を述べたある国の監督は、昨年の世界水泳では予想以上の好成績で、手放しの喜びようであった。採点競技において、客観的評

価は限界がある。それが面白さでもあったわかっていてもなお、割り切れないことが多い。

今回の審判員に対する不平不満を受けて、2005年2月に開催予定のFINA シンクロワールドセミナーでコーチとジャッジが議論することになった。

### 3.4 プロテスト

話は戻るが、結局、一部の監督の抗議は正式なプロテストとして申請されることなく、ミーティングでの非公式の抗議という形で終わった。プロテストを行うには、競技終了後30分以内に、書面で、50スイスフランを添えなければならないというルールがある。誰一人正式な手順でプロテストを提出しなかったため、この問題は机上に乗ることなく過ぎ去った。

帰国後、日本のコーチから聞いて知ったのだが、競技会中に、ある有名選手が、正当な評価が下されなかったことを不服とし、他国のシンクロ選手に声をかけ、同意者を集めて署名運動をしていたらしい。これについても正式な形でFINAへは上がって来ていない。

本大会は、このような荒波はあったが、津波には至らず無事に競技会を終えることができた。もちろん、われわれの競技の宿命である審判問題は解決されたわけではない。シンクロ競技の良さと難しさを考えながら、半永久的にこの問題に立ち向かわなければならないのかもしれない。

### 4. さいごに

貴重な紙面をお借りして、トレーナーとして1998年夏から2004年まで日本シンクロチームに帯同して下さった体育科学系の白木仁助教授に深謝いたします。先生には最初無理を言って、「とにかく一度練習を見に来てください」とお願いし、水中練習を見に来ていただきました。先生の最初の言葉は、「なにこれ？ なにがどうなのかわからないよ。宇宙人みたいだなあ。」でした。そして続けて、「わからないから面白いかもしれない」と言われました。それから6年の間、すべての競技会に帯同していただきました。選手らが2度のオリンピックを果敢に戦い抜けたのも、先生の綿密なコンディショニングとケアがあったからだと思います。女性社会の中で嫌な思いもたくさんされたことと存じますが、関係者の一人といたしまして心より感謝申し上げます。

なお、本稿に挿入した写真は、アテネオリンピック日本代表水泳チームのチームドクターを務められた、本学臨床医学系の金岡恒治先生が撮影されたものです。



立花、武田日本代表デュエットの演技  
(写真提供 金岡恒治氏)



シンクロ技術委員として競技運営(招集)を担当中の筆者と、出場直前の立花、武田選手  
(写真提供 金岡恒治氏)



日本チームの演技  
(写真提供 金岡恒治氏)